

学校の怪談

中村まさみ
Masami Nakamura

5分間の
恐怖

13階段



13階段

中村まゆみ

学校の怪談 5分間の恐怖



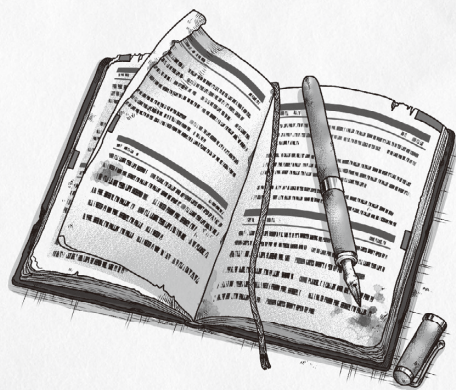
わたしがつとめる小学校で拾った一さつのノート。

なん人もの人が書き足している、きみのような日記なのだが、
そこには各地かくちの学校で起きた信じられない現象げんじょう、
身の毛もよだつおそろしいできごとが書かれていた。

いったいだれがこれを書き始めたのか……。

きょう、わたしが体験たいけんした、あの恐怖きょうふも

書き記しておかねばなるまい。



もくじ

レポート 7	はくせいのなみだ	77
レポート 8	新しいお母さん	89
レポート 9	神様の気持ち かみさま きもち	100
レポート 10	鬼はうち おに	111
レポート 11	ほけん室の先生	121
レポート 12	夜づりでつれたもの	133
レポート 13	死者が見える子 ししや	146

レポート 1	13 階段 かいだん	6
レポート 2	とくべつな二十分	19
レポート 3	かずま君 くみん	29
レポート 4	『ゆうれいを見た』	39
レポート 5	悲しい合唱 かな がっしょう	52
レポート 6	入らずの山	65

13階^{かいだん}段

「見つけた！」

きのうの昼休みに、なかよしのちとせ、はるなといっしょに、校舎^{こうしゃ}の中をた
んけんしていて、わたしは思わず目のまへの階段^{かいだん}を数え始めた。

「一・二・三・四・五……」

ねんのため、こんどは一段^{だん}一段^{だん}上がりながら、もう一度^{いちど}、数える。

「やっぱり13段^{だん}ある！」

「やった！ ついに見つけたねー」

ちとせとはるなも、こうふんしている。

屋上^{おくじょう}に上がるための少しせまい階段^{かいだん}を数えてみたら、ぴったり13段^{だん}あった。

こんな話、聞いたことがある人もいるんじゃないかな……。

下から上まで数えて、合計13段^{だん}ある階段^{かいだん}は、霊^{れい}の世界^{せかい}につながってるって話。
しかもその階段^{かいだん}のいちばん上に集^あまって、13のこわい話^わをすると、かならず
ゆうれいがあらわれるんだって……。

屋上へ上がるための階段は、校舎の東がわと西がわの二か所にある。

でもふしぎなことに、13段だったのは西がわの階段だけで、東がわの階段は14段だったんだ。

それはなんども数えたから、ぜったいまちがいない。

どちらの階段も、屋上へ出るためのドアは、かぎがかかっていて、開かないようになっている。階段を上りきったドアのまへのスペースは、少し広くなっていて、どちらの階段も、左の方にかくつと曲がって屋上に出るようになっていた。

「場所が見つかったとなれば、あとはいつ実行するか……だね」

はるなが、いたずらっ子のような目をしていった。

三人で相談して、今週金曜日の放課後にしようということになった。

なにをって……？ それはもちろん……ふふふ。

わたしたち三人は、おたがいの家が近いこともあって、ようちえんのころからずっとなかよし。ママたちも大のなかよしなんだ。

しかも、三人とも、ふつうの女の子ならキヤーキヤーいうような、こわい話が大好き。それぞれがネットに上がってる怪談を教え合ったり、本をかし合ったりしている。

パパやママにいうと、そんなことやめなさいっていうだろうし、先生に見つ

かったら、ぜったいおこられるだろうから、計画はわたしたち三人のひみつにして、こっそりやることにした。

「はやく金曜日にならないかな」

わたしがワクワクしながらいうと、ちとせとはるなが口をそろえた。

「あやか、こうふんしすぎー！」

待ちに待った金曜日がきた。

こんなに一週間が長く感じられたことは、いままで一度もなかったかもね。

じゅぎょうが終わったわたしたちは、教室で帰りの会をすませると、だれにも見つからないように、三階の西がわ階段にむかった。

きょうは朝から大雨で、いまこうしてろうかを歩いていても、どこもかしこもみようにうす暗くて気味が悪い。

「うん」

階段の上り口についたわたしたちは、おたがいの顔を見合わせながらうなずいた。

あかりのともっていない、真っ暗な13階段を、一段一段上がっていく。

「ね、ねえ、このまえきたときも、こんなに暗かったっけ？」

いちばんうしろからついてくるはるなが、ぼそりとつぶやくようにきいた。

「たしかに。あのときだってあかりは点いていなかったし、屋上のドアにまどもないんだから、外の天気は関係ないよね……」

ちとせの言葉^{ことば}を聞き、実はわたしも同じように感じ^{かん}ていた。

(でも、ぎゃくに考えれば、どうしてあのときは、あかるく感じ^{かん}たんだろう……?)

そんなことを考えているうちに、わたしたちはいちばん上の、ドアまえのかくつと曲^まがったスペースに着^ついた。

曲^まがったところに行^いってしまえば、下からわたしたちは見えない。

わたしはかんたんに、ルール説明^{せつめい}を始^はめた。

「いい? どんなにこわくても、ぜったいに13話、話し終^おえるまで、止めることはできないの。」

とちゅうでなにか起^おこっても、ぜったいに階段^{かいだん}の方^{かた}をふり返^{かえ}ってはだめ。

そして、これが大事^{だいじ}……。

もしさいごになにかがあらわれたら、大きな声で『この階段^{かいだん}は12段です!』ってさげぶこと」

だれかののどが、「ゴクリ」と鳴るのがわかった。

いよいよ『階段^{かいだん}の怪談^{かいだん}』がスタート。

さいしょに話をするのはわたしだった。わたしは、ある町につたわる、首のないおじぞうさんの話をした。

順番^{じゅんばん}にこわい話をしていき、ちとせが十話目を話し終^おわったところだった。

ズズ……

ふと、階段かいだんの方からなにかが聞こえた気がして、三人、同時に口をおさえた。でも階段かいだんを見てはいけない。

息いきをひそめて、三人で耳をそばだてる。

まちがない。だれかが……だれかが、ゆうっくりゆうっくり、階段かいだんを上ってきている。

「ひっ！」

思わずはるなが、小さく声を上げるのがわかった。ちとせは、目をつぶって

ふるえている。

「あ、あと三つ！ あと三つだからね！ じゃ、じゃあ、わたしが……」

勇気ゆうきをふりしぼって、わたしがそーい終おえるか終おえないかという、そのときだった。

スタツ スタツ スタツ……

階段かいだんの方から、いきおいよく上がってくる足音がした。

わたしたちは思わずだき合って、下り口にじっと目をこらした。

ごおんなどおごろおおでえええ……なあああにいいじいでえる
のおおお

とつぜん、かべのはしから、真^まっ黒^{くろ}いなが、ぬっと顔をのぞかせて、気^き
味の悪い^{わる}声でいった。

「ぎゃーっ!!」

わたしたちは、心臓^{しんぞう}が止まるのではないかというほどおどろいて、ぜっきよ
うしていた。

力いっぱいおたがいを引きよせ合って、なんども頭がごつごつぶつかって、

いたかったけど、それどころじゃなかった。

「だれだっ！ そこにだれがいるのかっ！」

とつぜん下からそんな声がひびいて、わたしたちは転^{ころ}げるように階段^{かいだん}をかけ
下りた。

そこにいたのは、体育^{たいいく}の荒木^{あらき}先生だった。

先生のすがたを見たたん、わたしたちは、先生にだきついて、わんわんな
いた。

わたしたちから事情^{じじょう}をきいた荒木^{あらき}先生は、ひとりで階段^{かいだん}の上をかくにんしに

いつてくれたけど、なにもいなかったといわれた。

たんにんの先生にもすぐくしかられて、「二度とこんなことはしません」なんて、やくそくまでさせられちゃった。

だけどね、おかげでわたしたちはよくわかったよ。

こういうことは、軽がるしくやってはいけないんだってことが……。

レポート 2

とくべつな二十分

わたしが通っている学校には、一年に一度だけ、「とくべつな日」というのがある。

だけどわたしたち児童は全員、その日を「だめな日」ってよんでいる。なぜそれが「とくべつ」で、「だめ」なのか、それにはこんな理由がある。

その「始まり」の合図は、とんでもない時間に鳴るチャイム。